昭和63年2月27日発行

静岡大学理学部同窓会会報

NO.4

発行所
静岡大学理学部同窓会
静岡市大谷836
静岡大学理学部内
Tel 0542-37-1111(代表)
会長　赤池大樹

過去・現在・そしてこれから

理学部同窓会会長　赤池大樹

五十九年八月に同窓会を設立してはや四年、昨年の七月には第二回の総会を持ち、二期目の役員の選出を行いました。引き続き会長を受けたわけですが、まだまだ前途多難です。会員各位のご協力を切にお願い申し上げる次第です。日本をとりまく世界の情勢もはなはだ厳しいものがあります。円高、金融不安、加えて大きな犯罪が日常のごとく新聞紙上をにぎわせています。我々も一歩外に出れば毎日が緊張の連続です。そんなとき、ふと学生時代を懐かしく思うことがありませんか。理学部が発足したのは、昭和四十年四月、三十九年十月に東京オリンピックが行われました。文理学部が理学部と人文学部に分かれたため学生の数が増え校舎が不足しました。それで急拠プレハブ校舎が建てられ、私達はそこで学びました。まさか大学でプレハブ校舎に入ろうとは夢にも思っていませんでした。同時に、現在の片山校舎の建設が進み、四年時から片山校舎に移りました。私は臨済寺のすぐ前に下宿をしていましたので片山へ通うのがなかなか大変でした。一分で教室へはいれたのが三～四十分かかるようになり雨の日などはもっと大変でした。サークルは卓球部に所属していました。静大のクラブの中では強いほうで東海地区の一部校（上位六チーム）でした。部員も大勢（五十余名）いてにぎやかで楽しいクラブでした。柔道場、卓球場、空手、バスケットの小さな一棟でした。卓球台は三台、いつ行っても満員で順番をまって練習をしました。待っている時は、上手な人のフォームを見て学び台に付いたときは、一生懸命練習をしました。四年間で七年いや八・九年の付き合いができました。一年のときは卒業された先輩や四年三年二年の先輩とそして四年のときは三・二・一年の後輩との付き合いです。大学時代の思い出としては卓球部における数々の思い出と勉強の難しさです。でも最大の思い出は家内との出合いです。静岡大学に入ったおかげでいまの私の家内と知り合いそして結婚できました。現在静岡県立富士高等学校で数学の教師として勤務しています。

さて、身の上話はこれくらいにして同窓会のほうに話をもどします。二期目の目標は、ともかく会員各位の住所を出来るだけ正しく把握したいと言うことです。先日（十二月五日）も静岡で役員会を持ち、名簿の管理をどうしたらよいか話合いをしました。現在同窓生二千六百余名です。年々住所が変わります。それを管理することはとても大変です。住所の判らないかたも多数おられます。前回の名簿では判っていても今回の名簿では判らなくなった人もおられます。毎年多くの人の住所が変わります。今まではこれを手作業で修正、管理をしてきましたがこれから先を考えますととても不可能です。そこでワープロを使用して機械で管理してはどうだろうかと考えました。しかしこれも考えてみますとなかなか大変なようです。第一にお金がかかります。第二にワープロを打つ人に大きな負担がかかります。とにかくもうすこし考えることにしました。よい方法があったら教えて下さい。それではお身体に気をつけてご活躍下さい。

（数学科第一回卒）

カレイとワイン

久米一成

昨年の秋、約一カ月の間『ヨーロッパにおける環境破壊、とくに酸性雨の実態と対策について』というテーマでスウェーデン、西ドイツの研究機関を訪問する機会を得ることができた。初めての一人旅で失敗も多く、冷や汗と緊張の連続であったが、食事、特に魚料理が非常に美味しかったことが、印象に残っている。

スウェーデンのザリガニ料理、スモーガスボードはあまりにも有名であるが、ここは魚の宝庫であるバルト海、北海に面し、魚も非常に美味しいところでもある。スウェーデン第二の都市、エーテボリ市にあるスウェーデン環境研究所を訪れたとき、ここの主任研究員であるフットベリー氏が、近海で取れる美味しい魚を出す店があるからといって、昼休みに郊外のレストランへ案内してくれた。出された魚は、大学ノート大ほどもあるカレイで、フットベリー氏が私にウィンクしながら『どうだ静岡ではこんなすごいのは取れないだろう』と誇らしげにいったので、静岡での名物の魚はと、ふと考えたが『桜エビ』、『生ジラス』しか思い浮かばず、口ごもってしまった。

スウェーデンでは、酒類の販売に関して法律が厳しく取り扱い店も限られ、また税金も非常に高いのでなかなか手に入りにくいという。日本では街角の自動販売機で簡単に買えますよと言うと、危うく後ろにひっくり返るほど驚いていた。この様に貴重なアルコールなのに、食事中に彼からワインを勧められた時、つい普段の習慣で（？）、反射的に勤務中ですからと訳の解らないことを口走ってしまい、その場で非常に後悔してしまったことを覚えている。

結局スウェーデンではアルコールは飲む機会を逸してしまったのである。翌日次の訪問地、西ドイツへ向からインターシティ列車の中で、スウェーデンの失敗を深く反省し、『来るものは拒まず、去るものも追う！』という精神で今後は臨もうと、堅く決心したのであった。

（化学科第九回卒）

酸性雨の影響による立ち枯れした樹木
（西ドイツ　カッツェンコップ山）

最近の理学部の状況 (3)

化学科教授　奥村保明

昭和六十二年は、高温超伝導物質の発見に始まり利根川博士のノーベル医学・生理学賞の受賞等に至る化学に関する話題の多い年であった。宇宙開発から遺伝子工学まで科学技術の進歩には目覚ましいものがあるが、それを支える素材＝物質の科学の基礎としての化学の重要性は増すばかりである。

理学部化学科は昭和二十四年発足の文理学部の改組により昭和四十年四月に誕生し、昭和六十二年三月までで七百余名の卒業生を世に送出した。昭和五十一年には大学院修士課程が設置された。本学の修士課程を終えてから他大学の博士課程に進学する人の比率が近年高くなってきた。最初から他大学の大学院に進学する人も多く、中には大学の教官として活躍している人も既に何名かある。化学系企業で研究者として活躍している人も数多くあるが、物理化学実験でコンピュータとの出会いもあってか、コンピュータ時代に相応しくソフトウェア方面で活躍の人の数も増加しており、修士論文や卒業研究での理論計算も目立つ様になった。化学科が昭和四十年に発足してから、途中で他大学へ転出された教官は四名であるが、内三名が発足後に着任された方である。旧制静高から文理学部を通して教鞭をとられた反応物理化学講座の池田利男教授が昭和五十六年に、生化学講座の下村道夫教授が昭和六十二年に停年退官された。この三月には構造物理化学講座の柴田周三教授が退官されるので、教官は理学部発足後に着任した者ばかりとなる。また四月には五名の臨時学生定員増があり一学年五十名の大所帯になる予定である。昭和五十六年に反応物理化学講座に着任した相原淳一助教授が昭和六十二年十二月、「芳香族性の起源と本質の理論的解明」の業績に対して日本ＩＢＭ科学賞を受賞した。化学科の新しい時代の幕開けを告げる出来事であり、大学院博士課程の設置を目指して新たな発展を期待したい。

第２回総会のパーティー
（昭和62年７月５日）

学科同窓会だより

静岡大学地学教室同窓会

加藤　和男

卒業して早十九年過ぎその間に大学の跡地、大岩と新地、大谷の変容には驚ろかされる。

我々の大学の頃は文理学部から理学部、人文学部への改組、大谷への移動など静岡大学の飛躍の時期であった。

一九六五年文理学部地学専攻科は学部改組により理学部地学履習コースとして受け継がれ、一九七五年地球科学科の設立へと変遷した。他の学科にはない例である。この特例の地球科学の同窓会を紹介する。実は、地球科学科独自の同窓会はない。文理学部、理学部（地学履習コース・地球科学科）、教育学部の合同で静岡大学地学教室同窓会を作っている。この形には深い意味があり静岡大学の発展とともに形成されてきたもので他の学科にはない独特のもので我々の誇りでもある。

一九四九年静岡大学設置の当初から文理学部、教育学部の先生方が地学を研究したい志のある学生は静岡大学の学生であるならば学部の枠を越えて面倒をみようという信念のもとに研究指導にあたられ、その信念はいまだに絶えず地球科学科になっても受け継がれ、人間味ある教育が行なわれている。かって、大岩の理科館の地学研究室は、文理・教育の両学部の研究室が隣合わせというユニークなもので学生の交流も盛んで恵まれた環境であった。

こんな状況下で卒業した学生は、その後も交流が盛んで、学部単位で同窓会活動をするよりも学部などの枠を越えて一つになり同窓会活動をした方がよいということで地学教室同窓会を合同で設立した。一九八三年四月二十日のことである。地学教室同窓会の益々の発展を祈念する。

会は会員の新睦と知識の交換を計り地学教室の発展に貢献することを目的とし、名簿の発行、改訂、退官される先生方の記念事業などを行ないます。会員数は約五五〇名です。

（地学履習コース第一回卒）

職場紹介

細田　誠

浜松ホトニクス㈱はその名の表わすとおり、静岡県浜松市に存る。ちなみに浜松は静大工学部のある所で、学生時ぶん、工学部のやつが浜松に行けないと言ったら、留年を指したあの浜松である。その工学部又は浜松駅より車で三十分程行った所に本社工場がある。

浜松ホトニクスは旧社名、浜松テレビと言い、ホトマルチプライヤーチューブ（光電子増倍管）という光検出器で有名なメーカーである。私なども静大四年の時、井上研で卒研実験の時に初めて、高価な浜松テレビ製ホトマルにお目にかかり、そのメーカー名から、いなかの実家から山上に見えるUHFテレビ局のアンテナを想像しながら、暗室中で後生大事にホトンカウントをやっていたというわけであった。

そのような縁あってか、そこに勤めているわけなのだが、けっこう変った会社である。当社は国内唯一のホトマルメーカーであり、又、世界においてもRCA、フィリップス、EMIといった競合メーカーをぬいて今やホトマルのトップメーカーになってしまった。当社のホトマルは分光器、CT、高エネルギー物理用等に使われているのだが、最近では神岡の陽子崩壊検証装置がマゼラン星雲超新星ニュートリノを検出した記憶が新しい。この装置にも当社製の大型ホトマルが多数使われており、純水プールの壁に茶金色に光っている特大電球のようなやつがそれである。又、このあいだのハレー彗星探査機、すいせいの画像検出部も当社製である。

と、ここまで書くとエライカッコイイことばかりやっているようにも思うが、えてしてそういう話はもうからない。従って通常はけっこう泥くさい仕事をやってもうけるわけである。現在、当社には電子管、固体、システムの三事業部があり、各々がんばってもうけている。但し、世の中少々、円高、不景気等もあり、なかなかに苦戦もしている。OB諸兄も当社製デバイス等を見かけることあらばよろしくかわいがってやってください。

ちなみに静大物理からは細田、北原、山口の三名が入社しており、何のくされ縁か何と三名とも井上研です。当社独自の根明か＋遠州的雰囲気の基、三名共まあまあよろしくやっておるようです。但し、三名共、楽勝かというときにあらず。当然、当社にも会社というものに付きものの種々の苦労はあり、各人それにめげない耐力で研究、開発、製造にいそしんでおるしだい。まぁその辺の野武士的やる気が当社の良い点かとも思う所似です。

（物理学科第五回卒）

同窓生の声

岡村　俊卓

静岡大学理学部同窓会が設立して、はや四年がたとうとしています。その間各役員の方々の並々ならぬご努力に深く敬意を表したいと思います。

さて、私が在籍していた学年は、共通一次試験の始まる一年前、静岡大学が国立二期校であった最後の学年でした。そのせいか他大学を受験するために大学をやめていく者が相次ぎ非常に寂しい想いをしたものでした。それでも、何とか四年間無事にすごし、卒業して六年たった今振り返ってみると、学生生活は良かったという印象を持ちます。

また、大学時代の同級生から突然便りをもらったりすると、ひどく懐かしい気がします。それというのも、卒業後はそれぞれが各県に分かれて離れ離れになって会う機会がほとんど無くなってしまうからではないでしょうか。全国各地から学生が集まってくるというのも大学の良さだったように思えます。同窓会には、このように各県に分かれて活躍されている同級の方々と同窓会報を通じて再会できるという楽しみもあります。久し振りに懐しい同級生の名前を同窓会報で見つける、それだけでも同窓会の価値があるように思えます。では、紙面もつきましたので、理学部同窓会の今後の発展を期待してつたない文章の終わりにしたいと思います。

（数学科第十四回卒）

大場　誠

理学部を卒業しまして早二年が過ぎようとしています。卒業後も年に二回ほど気の合った同学科の仲間で飲み会を開いています。お互い仕事に追われる身ですので、毎回少人数しか集らないのですが、久しぶりに友と語らえれば話はなかなか尽きません。同期の卒業生全体で同窓会を、との声がありますが、音頭をとる人が出ないまま現在に至っています。

同窓会について思うことですが、まず同期の卒業生での同窓会活動を活発化させると良いのではないでしょうか。立派な同窓会名簿がありますので、連絡をとり合い、一度会を催せば新たな可能性が生まれてくると思うのです。横のつながりが密になれば縦方向にも広がっていくのではないでしょうか。

同窓会発足から三年ということですが発起人の方のご苦労は大変なものであったと思います。我々、卒業後間もない者たちが同窓会を盛り立てていかなければなりません。さぁみなさん。今なら同窓会がお得ですよ！

（物理学科第十八回卒）

瀧　雄之

昭和六十二年度理学部同窓会に出席させていただきました。最初はサボろうかとも思いましたが、自分は貴重な静岡県在住の卒業生だ、と思い直し出席しました。

会場へ行くと出席者が予想より少なく、同窓会前半はもの静かな雰囲気の中で進行し、参加していて緊張しました。しかし、晩餐会ではビールも入り、先輩方との雑談もはずみ楽しい同窓会でした。

現在でも同窓会役員のT氏には分析関係で、わからない事があるとすぐ頼ってしまう私ですが、これも理学部の先輩という気安さがあるためで、同窓会がその掛け橋となってくれました。ですから、同窓会の参加者がもっと増えれば、この様な、人とのつながりも広がり、同窓会にも参加者にも大いにプラスとなることでしょう。

これからの理学部同窓会のますますの発展、期待してます。

（化学科第十四回卒）

芦川龍之介

地元の中学校の教師などをしているとろくなことはありません。部活動や地区の行事等で日祭日は平気でつぶれるし、また地縁血縁の弟子が相手だとやりにくいことも多くあります。丁度私の年まわりなのでしょうが、一昨年父を亡くした頃より、吹きまくる冠婚葬祭の嵐の中をヘロヘロと漂っているような気さえします。この辺で老母と猫との生活に区切りをつけ嫁さんでもと考えてはいるのですが、テレビの音さえうるさく感じる始末では、立つ物も立たんという訳です。

目下私の悩む所は、四十人の生徒をどの高校に送り込んでやろうかという非常に世俗的な問題と、増減また増減の栄枯盛衰を繰返す猫どもを眺めて、「猫に仏性ありや否や」という禅問答みたいなしかし猫族にとっての一大事を深く考えることなのです。

（生物学科第十一回卒）

山梨　正人

「同窓会に望むことというテーマで原稿を書いてもらえないか。」と職場の先輩でもあるTさんから頼まれ軽い気持ちで引き受けてしまったもののいざ書こうとするとなかなか考えがまとまらない。思いつくことはつまらないことばかりで参考になるとは思えないがどうか御勘弁いただきたい。

先日仕事で久しぶりに母校を訪ねる機会があった。卒業以来学内に入ったのは始めてであり、学生時代が思い出され非常に懐かしくまた楽しくもあった。卒業してしまうと大学を訪れる機会もほとんどなく、静岡に住んでいる者でも通りすがりに眺める程度になってしまうと思うので、会合の場所を大学にしたらと思うがどうだろうか。

卒業生の一人として興味があるのは「今、静大はどうなっているのか」と「一緒に大学を卒業した友人達はどこでどうしているのか」である。前者は幸い会報で知ることができるが後者については是非詳細な名簿を作成して欲しいと思う。私は不勉強のせいか理学部の歴史をよく知らないため、合わせてそれが解るようなものにしていただければ一層有難い。

（地球科学科第七回卒）